

信 毎 歌 壇

小島 なお選

この道もこの橋もこのトンネルも五輪会場跡への
ちかみち (長野市) 原田 浩生
夢に色ありやと問はれ大虹の一番端の色と答へぬ
(長野市) 南郷 修二
薄手から厚手に着替えるこの時期が一番母を思い
出してる (松本市) 竹内 千波
白蝶と黄蝶舞ひ行く日暮れ時やがて白蝶野に消え
にけり (飯綱町) 坂井 寿男
ボウリング女子のアニメを染しめば後ろすがたの
鷲(じん)に見ゆ (千曲市) 大谷 善邦
雨に濡れ駅伝練習する音子を母は車でゆるやかに
追ふ (飯山市) 市村紀久子
キャベツの葉一枚のみを食むならば蝶になるまで
青虫漬さず (上田市) 宮崎 拓男
古本を開けば手首むす痒し目に見えぬ物この世に
数多 (小海町) 依田 久代
けんか終え花びんの花を活けかえさうやって余
生は過ぎて行くのか (塩尻市) 丸山 肇子
採寸をしてまでいらぬと言ふ靴を足は大事と娘は
買いくれぬ (麻績村) 小山みよ子

佳作
ガチャガチャと即物的な名もある虫鳴いてゐるな
りアクセントなく (箕輪町) 向山 政俊
我が村の神社の歴史滔々と語る宮司は余所の町人
(小諸市) 杉山 和夫

選評
第一首、五輪会場を中心として整備された土地。どこを通っても跡地へつづく道々は寂しい夢のなかのよう。第二首、不思議な問答。私たちの夜ごとの眠りは、遙かな空へ連なるのかもしれない。第三首、秋のはじまりの空気が懐かしい思い出を呼び起こす。追憶は肌にあたたかい。第四首、暮れてゆく陽を惜しむように戯れる蝶。白蝶の淡く儚い色彩がひとひの終わりの吐息となり溶け込んでゆく。

米川 千嘉子選

腰曲がり勝負服着る気がうすれ二着をかわるがわる着てゆく (千曲市) 関 津和子
息子の使う弓の袋をつくりつつ次の傷みにわれ世に亡し (長野市) 池田よし江
不用なる漬物桶にメダカ飼ひ縁を叩きつけておけさ教へる (木曽町) 新村 亮三
分断は努力義務にもあらわれてヘルメットつける派つけない派 (松本市) 中村 博穂
老夫婦うなずき合つて「もう帰ろう」シヨッピングモール迷走すれば (伊那市) 赤羽 正彦
墓前にて野菜嫌いの子供らが茄子のおやきの好みを語る (千葉県船橋市) 長田 尚子
夕暮れを待たずコオロギ鳴き出だすおしゃべりだった夫の忌日に (上田市) 小林さよ子
動線ごと置いてた遺影減らそうか十六年の歳月がゆく (佐久市) 橋詰美代子
里の道車の行けばバキッバキ栗の実つづす音の響けり (長野市) 山田登志夫
左だけ靴の踵が擦り減る身平均的にはもう生きられぬ (千曲市) 石黒 信幸

佳作
日課とせる午後の散歩もままならず介護ベッドで総裁選観る (岡谷市) 吉池富貴男
米粒を両手顔面いっぱい付けて一歳のひ孫新米食す (南木曽町) 堀 みはる

選評
第一首、ここぞという時がなくなったのだ。二着を交代に着る、というのがリアルだが、そうした平穩の味わいもあるかも。第二首、弓袋というモノの存在感。そこから弓道に打ち込んできた息子と母の年月も思われる。第三首、佐渡おけさのリズムで叩いたのだろう。「縁を叩いて」が効いて楽しい。第四首、自転車のヘルメット装着は努力義務。こんな身近なことからすでに「分断」なのだから…。

小池 光選

雨の朝買いたての傘ひらきつつ生まれ変わったわたし歩きぬ (佐久市) 高橋衣里子
四種類の漢方薬を湯におとし掻きまぜてをれば魔女めく夜長 (長野市) 原田りえ子
きみ呉れし田川建三訳新約聖書日に一節一節味はふ (東京都小平市) 真鍋 真梧
爺さまがけさ煮てくれし粥あまく五臓に染みる力湧くこと (長和町) 羽毛田 栄
天折の母がのこししこの我は九人の孫の祖母となりたり (長野市) 近藤 光子
祖父祖母は知らずに逝けり寒き朝ひねればお湯のいでし蛇口を (長野市) 原田 浩生
月光の白々と差す秋の夜は温めの酒を一人酌むなり (松川村) 岡 豊村
赤い羽根の舞臺はしたれど近頃はつける人見ず羽はいらない (千曲市) 関 津和子
コロナ明けの運動会実施の花火かな川中島平のあちこち上がる (長野市) せきたつお
さよならの前に磨きしトラクター夫思い出し涙にじみぬ (長野市) 西沢 敬子

佳作
店員に聞けば事なき食品を取って巡りて探す喜び布団から右足だけが出ていたら右足だけを虫に刺された (佐久市) 水間喜美子

選評
第一首、雨傘ひとつでも新しいものにすれば新鮮である。まるで自分が変わったように感じられる。平明、素直な表現がみずみずしくてとてもよい。第二首、相応の年齢になって漢方薬を飲む。しかも4種類も飲む。だんだん自分が魔女めいてきた。奔放な発想が楽しい歌。第三首、信仰とは別に教養として聖書は一度は読んでおいていい。2000年読まれ続けてきたのである。

